

覇者の戦塵1944  
よう げき せん  
サイパン邀撃戦 [中]

谷 甲州

*Koshu Tani*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶ (次ページ) をクリックするか、キーボード上の▶ キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

挿画 佐藤道明  
地図 らいとすたつふ

覇者の戦塵 1944 サイパン邀撃戦 中 目次

轉章 メジユロ環礁(承前)

第一章 水上進撃

第二章 艦砲射撃

第三章 輸送船団

12

22

47

79



第四章 対戦車砲中隊

118

第五章 聴音雷撃

157

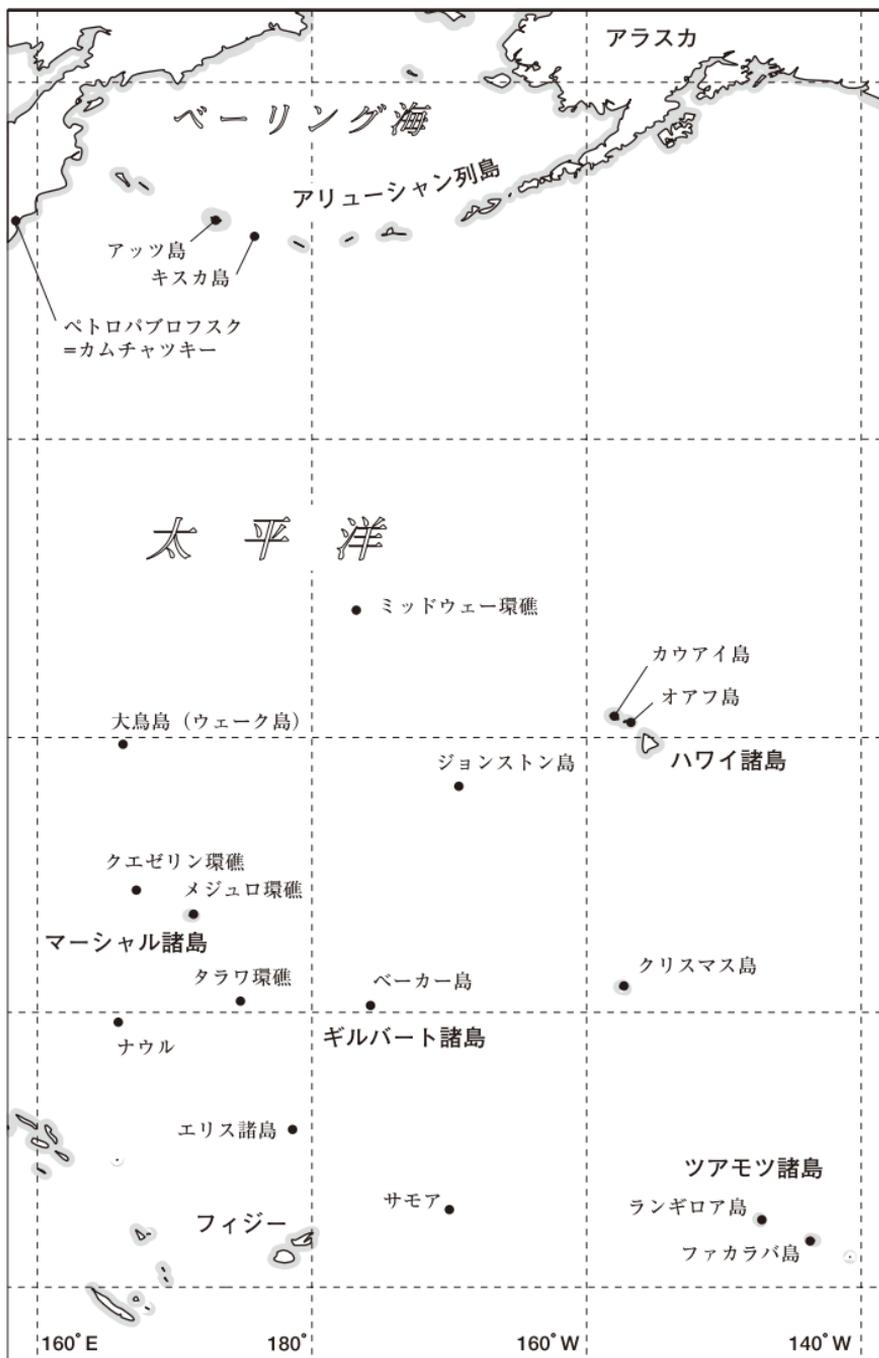
転章 持久戦

195

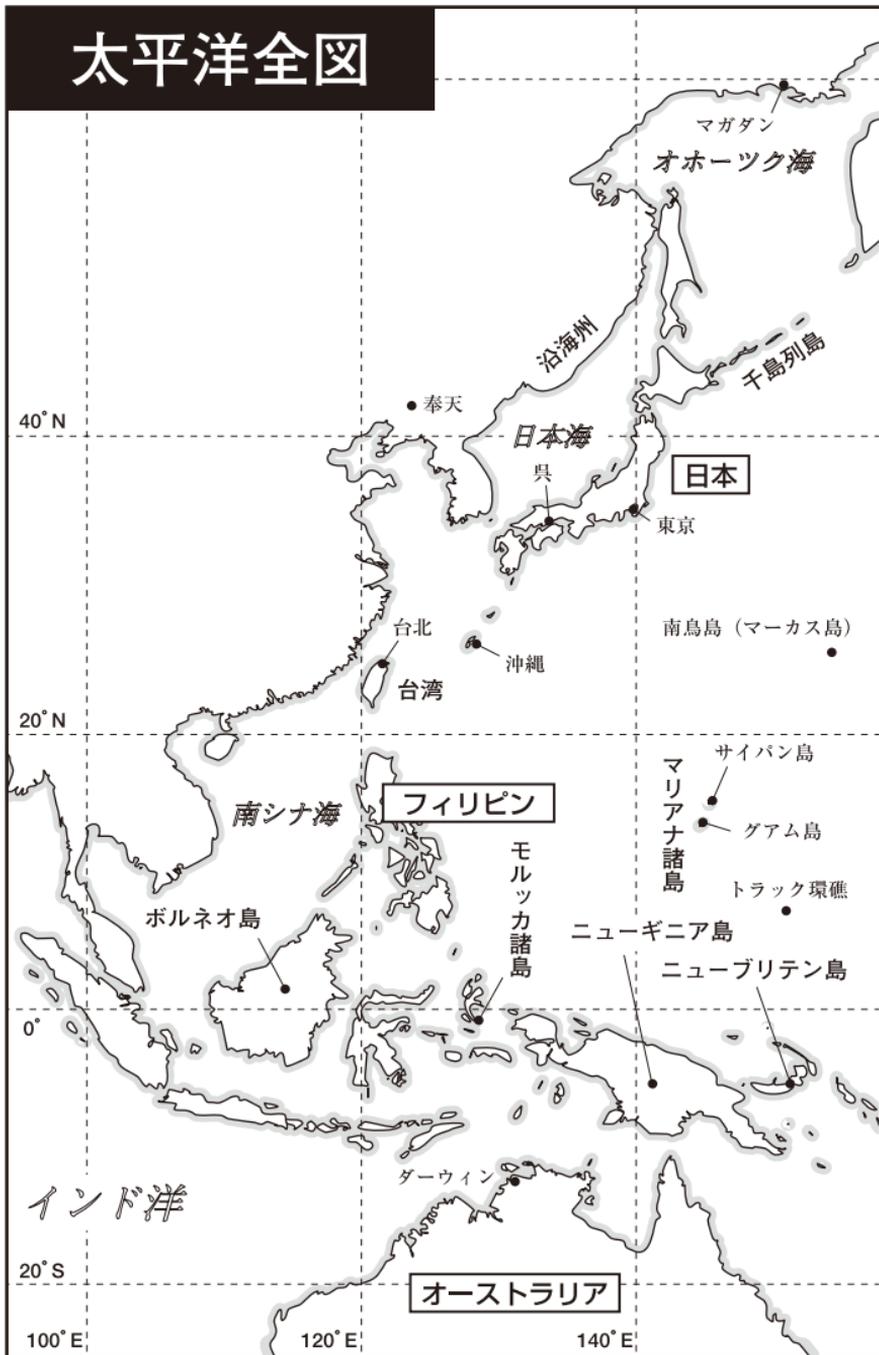
あとがき

209

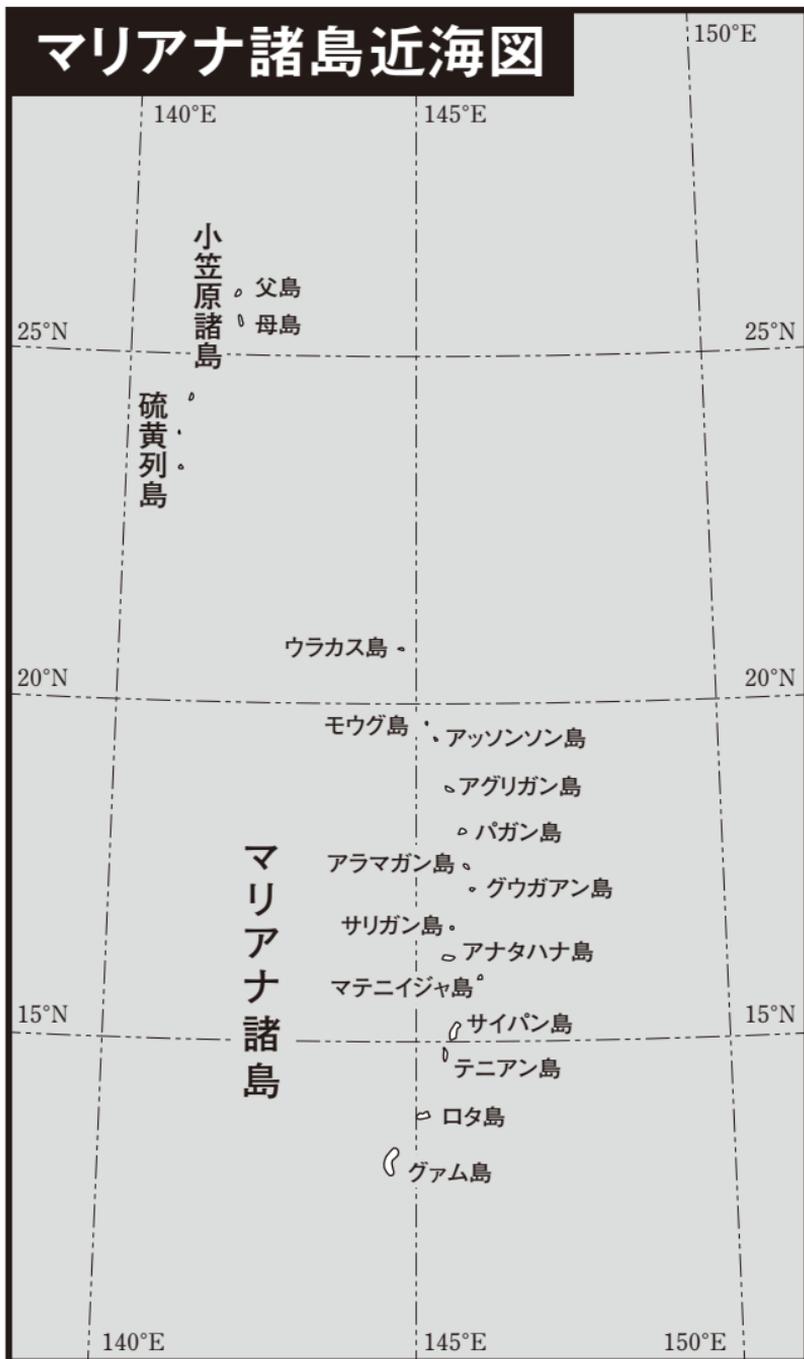




# 太平洋全図



# マリアナ諸島近海図



サイパン  
彩帆島詳細図





覇者の戦塵 1944 サイパン邀撃戦 中

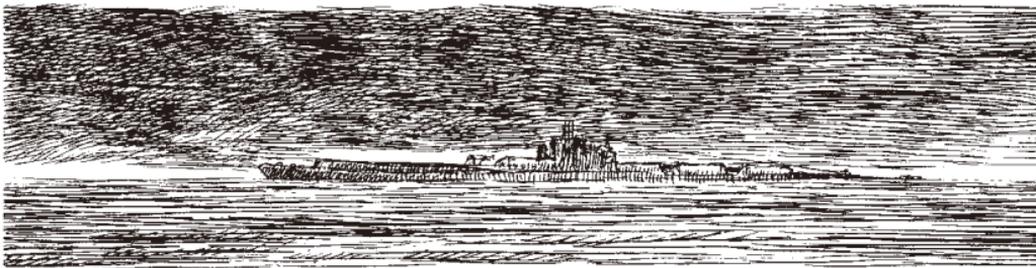
## 転章　メジユロ環礁（承前）

全作業を終了するのに、六分間が必要だった。

それ以上、時間をかけるのは危険だった。メジユロ環礁の全域を占領した米軍は、時をうつつさず飛行場を建設したらしい。もしも敵が伊号第五四潜水艦の存在に気づけば、夜間であっても攻撃機を飛ばさせるものと思われる。

伊五四潜は現在、メジユロ環礁の南縁から一〇海里の位置に浮上していた。搭載されている翔竜は火薬推進式の旧型で、有効射程は二万メートルとされていたからだ。発射時の噴射炎を目撃されれば、最短で五分後には敵機が飛来する。

だからそれ以前には、何があっても潜没していなければならなかった。ただし夜間にも哨戒飛行が実施されていたら、この前提は崩



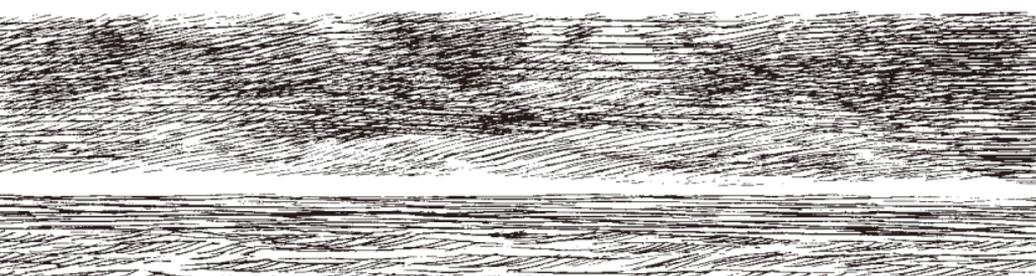
れる。在空の機体は高速飛行への移行が容易で、しかも充分に高度をとっていた。

いまのところ伊五四潜の対空見張り電探に反応はないが、油断することはできない。探知範囲外に敵機がひそんでいたら、五分よりも短い時間で飛来するものと思われる。そして伊五四潜の敵は、航空戦力だけではなかった。

環礁内に通じる狭水道の周辺では、複数の対潜艦艇が哨戒を実施していた。航空機ほどの機動性はないものの、潜水艦にとって大きな脅威であることにかわりはない。むしろ攻撃の執拗さは、航空機の比ではなかった。

計時を担当している川澄少尉は、不安から抜けだせないまま作業を見守っていた。さして広くもない甲板上では、多数の兵員が作業をつづけている。全員が無言だった。作業灯の淡い光の中で、ときおり手信号がかわされるだけだ。

だがそれも、作業が進展するにつれて間遠になっていった。実戦投入にそなえて、作業手順は何度も確認されている。あらためて声



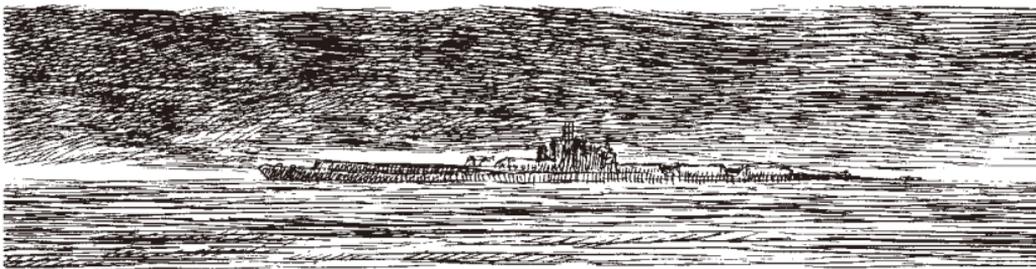
をかけなくても、全員がやるべきことを理解していた。流れるような動きで、四機の翔竜が発射準備をととのえていく。

それをみた川澄少尉は、ひそかに安堵の息をついた。いまのところ作業は順調に進展しているようだ。海上につよい風は吹いておらず、艦を動揺させるほどの波浪もなかった。敵の艦艇や航空機が、動きだした気配もない。

この分なら制限時間内に、全機を発射できるのではないか。そう考えたものの、漠然とした不安からは逃れられずにいた。前例のない破天荒な作戦だから、予想外のことが起きる可能性は否定できなかった。

作業自体は単純なものだった。格納筒から機体を引きだして主翼を展開し、射出機に据えつけた上で射出発進させる。簡単にいえば、それだけだった。発射される翔竜はいずれも火薬推進だから、主機の整備と始動に手間取ることもない。

ただし発進作業は、四回くり返す必要があった。搭載されている翔竜を、一度の攻撃で撃ちつくすのだ。それが最善の選択であり、



実現可能な唯一の戦術だった。今回の攻撃に関しては、好機は一度しかないと考えられた。翔竜を温存しても、次の機会ははない。

かといって無闇に多数を発射しても、戦果は期待できなかった。射出に時間がかかりすぎるからだ。その上に緊張感が持続できなくなつて、思わぬ事故を引きおこす可能性がある。格納筒の増設は可能だが、いまのところ実施される予定はなかった。

「三分経過しました」

艦長の森河内少佐もりこうちに、川澄少尉は告げた。艦長はかすかに頷いただけで、言葉を返そうとしなかった。恐ろしいほどの緊張感が、直に伝わってくる。艦長が背負っているものの重さが、ほんの少し理解できた気がした。

だが緊張しているのは、川澄少尉もおなじだった。伊五四潜は竣工して一年にみたない新鋭艦だった。画期的な新機軸などはないものの、過去の実績を踏襲した上で手がたく設計をまとめてある。

当初は水上機の搭載が可能な乙型巡洋潜水艦として就役したが、早い時期に改装されて翔竜搭載艦となった。メジューロ環礁の襲撃が

成功すれば、潜水艦隊における翔竜の運用にあらたな道が開けるはずだった。

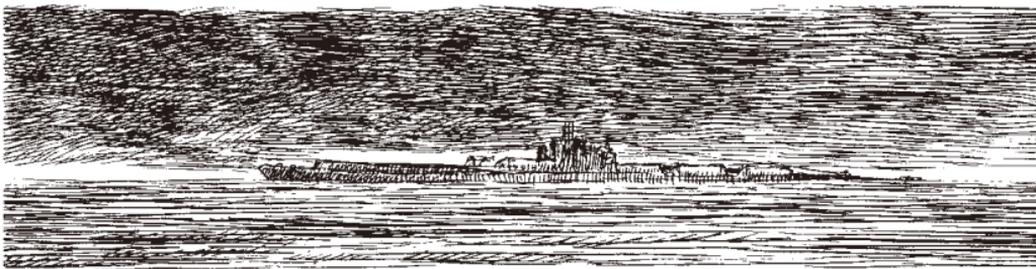
その重要な艦に、少尉のような初級士官が配属された。開戦前の戦力が充実していた時期なら、考えられない人事だった。激闘の連続で失われた潜水艦は多く、中堅士官が不足していたせいばかりではない。

消耗を上まわる勢いで増強が進展したものだから、長い時間をかけて丁寧な人員を養成している余裕はなかったのだ。したがって新任の少尉であっても、大尉なみの仕事量が期待された。当然のことながら、それに応じた責任も発生した。

ことに浮上の直後は翔竜の発射にそなえた風速の観測や、天測など重要な作業が連続した。迅速さが要求されるが、同時に正確さもとめられる。もしも無視できない誤差が発生すれば、翔竜は目標を見失って迷走しかねなかった。

「三分三〇秒経過」

ふたたび少尉は伝えた。すでに最初の翔竜は、射出機上に移動を



終えていた。最後の点検を終えた整備員が、艦橋上部の射出指揮官に合図を送った。指揮官は即座に応じた。作業員の退避を見届けたあと、一番機の射出を命じた。

すでに翔竜の主機からは、青白い炎が噴出しはじめていた。出力はまだ充分に上昇していないが、全力噴射を待っている余裕はない。高圧の空気が流入する音とともに、翔竜は発進した。射出機上を移動するにつれて、次第に噴射炎が長く力強くなっていく。

そのまま飛翔するかにみえたが、わずかに揚力が足りなかった。射出機の先端を離れた直後から、一番機は高度を落としてはじめた。海面に触れんばかりに、低く沈みこんでいく。だがそれも、長くはつづかなかった。

ようやく主機の出力が、安定したらしい。一転してじりじりと高度をあげはじめた。退避していた機つきの整備員が、控えめながら安堵の声をもらした。巡航態勢に移行した一番機は、安定した飛行をつづけている。噴射炎の光芒が、次第に遠ざかっていった。

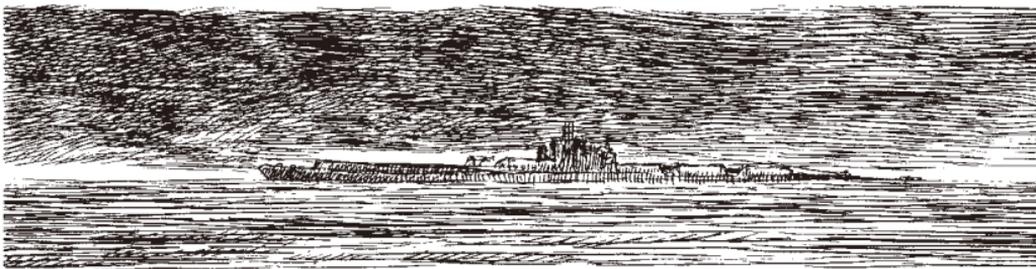
すぐに整備員は、退避所から飛びだした。滑走台を回収するため

だ。一番機を載せていた滑走台は、射出機の先端で停止したあと押しかえされてきた。前甲板を一杯に使って設置された射出機は、艦首方向にむかってゆるやかな登り坂になっている。

発進位置にもどってきた滑走台は、かなり勢いがついていた。だが整備員は手慣れた様子で、加速した滑走台に飛び乗った。そのまま軌条にそって移動し、司令塔の前部にある格納筒に入った。それが一番機の收容されていた格納筒だった。

二番機から四番機までの格納筒は、司令塔の左舷側後方に設置されている。すでに翔竜は引きだされ、主翼の展張を終えて待機していた。空になった格納筒は、水密扉が閉鎖されている。

発進の間際になって不具合が生じて、翔竜を収納する余裕はなかった。そのときには中樞部分を破壊して、海に投棄することが決まっていた。予定の時間を超過した場合もおなじだった。六分以内にすべてが終わらなければ、発進作業を中止して潜航するしかない。滑走台が片づけられるよりも先に、二番機が移動を開始していた。そしてわずかな時間も無駄にすることなく、射出位置についた。発



射間隔は三〇秒と決められている。それが限界だった。作業時間を短縮できたとしても、射出機の能力が追いつかないのだ。

作業は粛々と進展し、次々に翔竜は発進していった。経過時間を報告するたびに、川澄少尉は確信を強めた。何ごとも起こらなければ、すべての作業は六分以内で終了する。そう考えた。予想外の事態が起きたのは、最後の四番機が射出機上に移動したときだった。

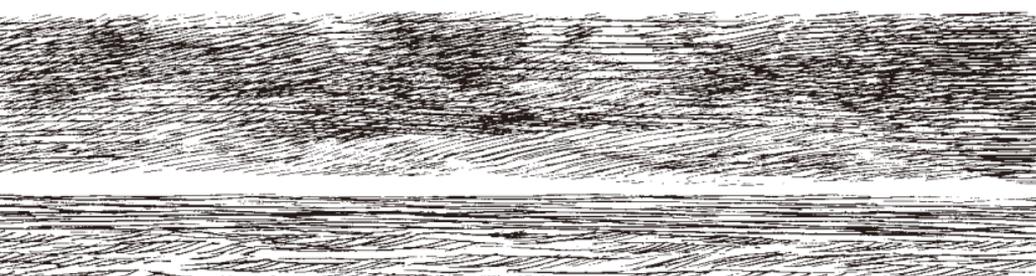
「あと五分かかる、だと？」

聞きとりにくい声で、森河内艦長が問いただした。嫌な予感がした。艦内から姿をみせた機関長が、性急に状況を説明している。

「予想を上まわる過熱で、安全装置が作動したようです。圧力が低下しているので、定格どおりの射出能力が期待できません」

要するに故障したのではなく、射出機に送りこむ高圧空気が不足しているようだ。連続発射の熱で危険な状態になったために、安全弁が開いて圧を逃がしたらしい。あらためて加圧すれば射出は可能だが、それには五分かかるということのようだ。

冗談ではないと、川澄少尉は思った。五分も潜航が遅れたら、間



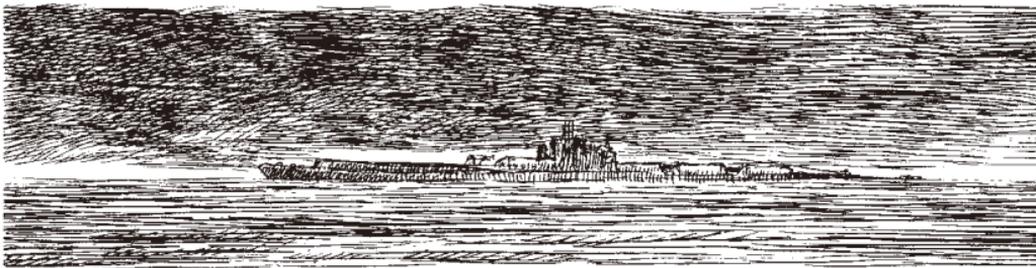
違いなく伊五四潜は敵機に捕捉される。そして反撃もできないまま、手ひどく攻撃されるはずだ。万にひとつも、逃げきれるとは思えなかった。

常識的には四番機の発進を断念して、機体を海に沈めるしかない。だが四番機を担当してきた機つきの整備員にとつては、容認できない事態のはずだ。高度な誘導装置を持たない旧型機とはいえ、かなりの思い入れがあるのではないか。

文字どおり我が子を育てるかのように、全霊をかけて整備してきたものと思われる。そして危険をおかして敵地ふかく侵入し、敵の鼻先で浮上するという大胆なことまでやった。発射の寸前になって中止を言い渡されても、納得できないはずだ。

その上に不具合が生じたのは母艦の射出機で、機体の整備に問題があったわけではなかった。機体の投棄以外に選択の余地はなくとも、諦めきれないだろう。状況を察したのか、甲板上に残っていた整備員が艦長に注目している。

森河内艦長は、一瞬の間を置いて言葉を返した。それが決断だつ



★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。